

【一】次の文章を読み、後の問いに答えよ。

アメリカやヨーロッパでは、自分の書いた日本語の本を見せると、みんなが文字を見て感心するので、わたしたちはちょっと得意になることがある。漢字が美しく複雑に見えるからだけではない。グローバリゼーションの嵐の中で、東アジア独特の文化などもないだろうとあなたたちは思っているかもしれないけれど、わたしたちはこのように古い文化を持っているのです、こういうもう何千年も存在する文字を使って、「共產主義」とか「国民主権」というような概念も西洋語の助けなんか少しも借りなくとも表現することができると、という誇り。漢字は外から侵入される心配のほとんどない城壁のように、東アジアの文化の独自性という神話を保護してくれる。だから、わたしはかつて漢字が不得意で漢字テストに苦しめられた怨みも忘れて、いつからか漢字を熱愛し始めていた。しかし、柳父章の『翻訳語成立事情』を読んで、社会、個人、近代、美、恋愛、存在、自然、権利、自由、彼、彼女などの日本語は、すべて、西洋語を訳すためにほんの百年くらい前に作られた言葉だということを知った時には、がっかりした。そういう意味では、漢字だって外来語なのだ。中国から来て、西洋の概念を表すのに使われているのだから、二重に外来語だ。それどころか、カタカナが自分が他所者だと認めてしまう正直な外来語なのに対して、漢字がオリジナルぶる嘘つきの外来語に見えてきた。

もちろん小説には、新聞や論文ほどたくさん漢字二語の熟語が出てくるわけではない。それでも神経質になって、「解説」というのはやめて「ときあかす」とひらがなで書いてほくそ笑んだり「ひらがなだと」、「とき」は「朱鷺」や「時」かもしれないし、あかすで「明かす」イメージが浮かんで、明るいしてみる。そうやって、漢字を着た西洋を避けようとすることもある程度はできるが限界がある。

しかし、漢字が日本に入ってきたおかげで、西洋から来た抽象観念を訳すことができただけでなく、西洋語の勉強がしやすくなったことも事実だろう。そう考えて、腹を立てるのはやめた。たとえば、日本語では「みる」というたった一つの単語しかないところに、中国語にはいろいろあるらしいということが、「見る」²、「観る」³、「視る」⁴、「診る」⁴などの漢字を区別して使えるようになれば分かる。「みる」にもこれだけいろいろ違いがあるのだと分かった後では、英語を勉強し始めて、lookとseeは違うと聞いても、ショックは小さくて済む。中国語にそういう区別があるということを文字の次元である程度理解することによって、外国語が学習しやすくなっている。中国という文化先進国が近くにありすぎたために自分の力で抽象観念を作り出すだけの暇がなかったのは不幸⁵だったかもしれないと高島氏は書いているが、日本は放っておいたら本当に自分で抽象観念を中国ほど豊富に作り出せたのだろうか。ペシミストのわたしは、あやしいものだと思う。むしろ、ネイティブ・アメリカンのように独自の文化がそのままの軌道で発展をとげて、ずっと後になってから英語を学んで西洋の文化を別個に身につけて、自分の言葉と平行して英語を使いながらバイリンガルとして現代を生き抜くことになったのではないか。ウオロフ語など土地の言葉とフランス語と両方できるセネガルの文化人も同じである。その点、日本の文化人は、日本語だけで言えば、ヨーロッパやアメリカで書かれたものもたくさん読めるし、情報から閉め出されることはない。それどころか、ドイツ文学の翻訳なども、英語よりも日本語の方がたくさん出ている。バイリンガルにならなくても現代国際社会の一員として一応生きていかれる。そうすると、大和言葉でも中国語でも西洋語でもない、この曖昧で不純で混乱している漢字の領域が、救いになっている面もあるのかもしれない。

⁶日本の漢字の領域は、夢の島だ。ゴミの山だが、豊かで、探そうとすればいろいろなものがある。生き残るのに必要なものは探せば見つかるだろう。わたしはもう腹を立てるのはやめて、日本語という夢の島の住人になって、ねずみのようにせつせと仕事をしようと覚悟を決めた。

ところで、『翻訳語成立事情』を読んでいて感動したのは、翻訳語として無理に作られた日本語の単語の元にある言葉がオランダ語であることが多いことだ。たとえば、オランダ語のschoolheid(ドイツ語ならScholtheit)を訳そうとして、いろいろ案が出て、そのうちに「美」という訳語が日本語の中に定着していく。オランダ語はドイツ語と、非常によく似ている。

(Ⅰ)わたしは子供の時に日本語の「美」という単語を母語として習い、ずっと後になって外国語であるドイツ語を学んで初めて、schönheitという単語に出逢ったのだが、実はこれが「美」の元の姿の兄弟だった。ということは、子供の時に逢った日本語の単語の幾つかは、日本語にやって来た「種の移民だったのだ。そして後にドイツ語を習うことで、これらの移民の故里を知って、ああ彼らはこのあたりの出身だったのか、としみじみ思うのである。漢字という衣装は、大和言葉も新造翻訳語もみんな同じように着ることができるようから、出身地が分からなくなっているが、みんないろいろな土地から来ていた移民だったんだ、そして「美」という言葉の故里にわたしは今やと行き着いたんだ、と思うと不思議な感動を覚える。

(Ⅱ)しかし、「美」という単語は構えが大きいだけに、身体性が貧弱だ。『枕草子』⁸の類聚の章段に現れる「心ときめきするもの」「あてなるもの」「めでたきもの」「なまめかしきもの」「うつくしきもの」「とくゆかしきもの」「心にくきもの」などの様々な形容詞を見てみると、その知的、感覚的繊細さに比べて、「美」はコンクリートの塊のように感じられる。人間の神経に寄り添うような形容詞の一つ一つのまわりに映像を集めていくのが枕草子的な発想だとすると、「美」などという言葉がどのような文学を可能にしてくれるというのか疑問に思う。また、『花伝書』^{注4}の「花」という単語の使い方も面白いと思う。存在するのは「美しい花か」「花の美しさ」かなどといつまでも議論していいないで、「美」を「花」と訳してしまってもよかったのではないか。「花は抽象的でありながらも香りもあり、不思議さを感じさせてくれる。強いがケンイ¹⁰的でないし、上品だが気取ってはいない。世阿弥の語彙¹¹はひよっとしたら、西洋の抽象名詞を訳すもう一つの可能性をアンジ¹²しているのかもしれない。

西洋語の翻訳に使われている和製漢語の一番の問題点は、いつまでたっても成り金的な気取りが抜けないことかもしれない。

「恋愛が『色事』より高級に見えたのは、現代人が近松の描いた人間たちより高級だからではなく、西洋からの輸入品だからありがたがったのだらう。今では輸入品という感じはしなくなったが、「恋愛」という日本語の単語はまだまだ体温が低く、わざとらしくて、広がりがないのではないか。

柳父は三島由紀夫の文学を評して、「美」という翻訳語には宝石箱の外見のように中身が分らないので、なお高級に見える面があり、三島はこの単語を上手くちりばめることで、文学を尊く見せるといふ効果を上げている、と言っている。レイヴィストロースの『悲しき熱帯に、文字を持たないナムピクワウの人たちの酋長がもつたいいふて、白人のように字を書く真似をしてみて、部下たちに自分の偉さを示すシーンが出てくる。このシーンと三島の『美』という単語の使い方が似ていると言うのだ。

(Ⅲ)「この字は中国でも砂漠地帯の人たちの間で生まれた字で、彼らにとって羊が大きいということは素晴らしいことだったので、羊に大きいと書いて美なのです」という嘘が本当か分からない説明を受験参考書で読んだ覚えがある。ドイツ人にはトルコ人の経営する食料品店がたくさんあるが、ガラスケースの中にある大きな羊の肉の塊を見る度にわたしは、ああ、あれが美なのだ、と思ってしまう。

（多和田葉子『エクソフォニー——母語の外へ出る旅』岩波書店、二〇〇三年、による）

注1 わたし……著者は、ドイツ在住の日本の小説家である。

注2 百年くらい前に作られた言葉……柳文章の『翻訳語成立事情』によれば、翻訳語には、幕末から明治時代にかけて翻訳のためにつくられた新造語と、日本語としての歴史を持ちながら同時に翻訳語として新しい意味をあたえられた言葉がある。

注3 ウォロフ語……セネガル国内で広く通用するウォロフ族の言語。

注4 『花伝書』……世阿弥(一三六三～一四四二)の能楽論書『風姿花伝』のこと。俗に『花伝書』と称される。

注5 レヴィ・ストロースの『悲しき熱帯』……フランスの文化人類学者レヴィ・ストロース（一九〇八〜二〇〇九）の著書。

問一 傍線部 5・10・12 を漢字に改め、8・11 の読みを記せ。

問二 著者が傍線部1のように感じたのはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号をマークせよ。

ア
カタカナで表記される語は外国語の意味を利用して使われる訳語であるのに対して、漢字で表記される語はアジア固有の文字を使いながら西洋から輸入された音を表す語でもあるから

イカタカナで表記される語は外国語の音を利用して使われる語であるのに対して、漢字で表記される語はアジア固有の文字を使いながら西洋から輸入された概念を表す翻訳語でもあるから

ウカタカナで表記される語は外国語の意味を利用して使われる語であるのに対して、漢字で表記される語はアジア固有の文字を使いながら西洋から輸入された概念を表す翻訳語でもあるから

工カタカナで表記される語は外国語の音を意識して使われる語であるのに対して、漢字で表記される語はアジア固有の文字を使いながら西洋から輸入された概念を表す翻訳語でもあるから

問三 傍線部 2・3・4 の使い分けとして適当なものを次の中から選び、記号をマークせよ。

ア 医者が患者の様子をみる。

イ 留守中に子供をみておく。

ウ 劇場に演劇をみにいく。

問四 傍線部 6・7・9 にはどのような比喻表現が含まれているか。次の中から適当なものを選び、記号をマークせよ。

ア
直喩

イ
隠喩

ウ 擬人法

問五 次の文が入る適当な箇所として適当なものを一つ選び、記号をマークせよ。

ところで、「美」という漢字はどのようにして出来たのか。

ア
I

イ

ウ
III

問六 次の文章は、本文における「美」に対する見解をまとめたものである。空白部A・B・C・D・Eに入る語の順序として適当なものを次の中から選び、記号をマークせよ。

A の「美」という漢字は、羊が大きいことに由来するものである。近代以降、B を翻訳した「美」という言葉がCの中に定着していった。しかし、「美」という言葉の概念はあまりにも広く、しばしば捉えどころがない印象を与える。それに対して、Dのなかには、「美」の一言では言い尽くせないような、繊細な感覚の言葉が多数存在する。このように、西洋語の翻訳に使われたEには、いくつかの問題が残されている。

ア	A	中国	B	西洋語	C	日本語	D	和製漢語	E	大和言葉
イ	A	ドイツ	B	日本語	C	西洋語	D	中国語	E	日本語
ウ	A	中国	B	西洋語	C	日本語	D	大和言葉	E	和製漢語
エ	A	ドイツ	B	西洋語	C	和製漢語	D	大和言葉	E	日本語

問七 本文の内容と合うものを次の中から二つ選び、記号をマークせよ。

ア ドイツにはトルコ人の経営する食料品店がたくさんあるが、そのガラスケースの中に置かれた大きな羊の肉は、「美」の原初的な意味を表す西洋的な概念である。

イ オランダ語の *Schoonheid* の訳語としての「美」という単語が日本語に定着したが、その後、三島由紀夫が文学作品の中でこの単語を上手くちりばめることで、東アジアの文化の独自性は守られている。

ウ 柳父は三島由紀夫の作品における「美」の使い方と、レヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』における一シーンとが似ていることを指摘している。

エ 日本に漢字が入ってきたことは、東アジアの文化の独自性という神話を保つのに役立っている。それによって、西洋の抽象観念を訳すことができるだけでなく、外国語を勉強しやすくしている。

オ 日本語のなかの漢語はすべて、近代以後に西洋語を訳すために作られた和製漢語であるが、ひらがなで書くことによって、その使用をある程度は避けることができる。

二 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

ヒンドゥー教が世界最古の民族宗教のひとつであり、今日もなおインドの人口の八〇パーセント以上の人びとの篤い信仰を集める生きた宗教であることは、周知のとおりである。とはいえ、ヒンドゥー教というと、私たち日本人がいだく一般的な印象としては、多神教で、太陽や雷や火といった自然現象、人間や動物、樹木などを神格化し、とくに牛を神さまとして崇拜するため信者の多くは肉食を嫌って菜食を主義とする、あるいはカースト制度と呼ばれる階級制度によって身分がきびしく規定され、そのために社会の近代化がいちじるしく阻害されてきたなどといった、どちらかというと、前近代的な宗教というイメージが強いようである。さらに近年は、テレビの映像や旅行書の写真で紹介されるヒマラヤ山中の裸の行者たちの修行の姿や、ガンジス川（ガンガー）での信者たちのすさまじい沐浴の光景などによって、ヒンドゥー教に好奇の目が向けられることも多い。（一）

すくなくとも、多くの日本人は、ヒンドゥー教など、私たちの生活とはなんのかかわりもない、遠い異文化圏の時代遅れの宗教くらいにしか考えていない。A、そんな異国の民族宗教に興味をもつのは、専門の宗教学者かインド研究者を除けば、よほどの好事家か、風変わりなインド好きのヒッピーくらいだと思われるようだ。

ところが意外や意外、これがかならずしもそうとはかりは言えないのである。私たち日本人は、遠く父祖の代から、知らず知らずのうちに、日常の信仰や思想、思考方法などにヒンドゥー教から少なからぬ影響を受けてきているのである。すなわち、古来日本の精神文化の核であり、支えであった仏教、とりわけ密教へのヒンドゥー教（バラモン教）の影響をとおして、いっしょに私たちの祖先はヒンドゥー教の神々や教えを受容し、したしんできたのである。（二）

弁才天はもとをただせば、インドのサラスヴァティーという女神で、この女神が弁舌や学問芸術（とくに音楽）を司ることから、弁舌の「弁」、才能の「才」の字をあてて、弁才天と漢訳されたのである。「天」は言うまでもなく「神」の意である。今日よく、才能の「才」の字の代わりに財産・財宝などの「財」の字があてられて弁財天とも書かれるが、それは、この女神が同時に、富や財をも授けてくれると信じられているからであり、このほうが庶民受けするからであろう。

サラスヴァティーというのは、そもそものは、西北インドに存在したといわれる川の名前で、本来は河川や湖に棲む霊が神格化されたものであったらしい。日本でも弁才天というところ、ほとんどが川や湖、池など、水辺に祀られているのは、このためである。その姿も、インドのサラスヴァティーが白い衣をまとい、白蓮華の上に坐して、ヴィーナーという絃楽器を弾いているところから、日本の弁才天も琵琶を手にしている。弁才天は、いつのころから庶民のあいだでは通常「弁天さま」「弁天さん」などとしたしまれ、七福神の一つにもかぞえられるようになった。そして、その福相な美貌から「弁天娘」という呼び名まで生ま

れたところを見ると、古代ヒンドゥー教の女神がすっかり日本の神さまになりきって、庶民の人気を博してきたことがわかるのである。（Ⅲ）

七福神信仰は室町時代末期から始まった民間信仰で、人びとに福德寿を授けてくれる神々として、日本・中国・インドのいわゆる「三国」（ちなみに、昔の日本人にとっては、これら三国がすなわち、全世界であった。今日でもよく結婚式場などで、「世界一の」という意味で、「三国一の花婿・花嫁」といった讃辞を耳にする）から、七神が選ばれたのである。そしてこの神々の、いわば人気番付の上位七神のうち、弁才天ほか、大黒天、毘沙門天、吉祥天の四神までがインド起源の神さまであったというのはおもしろい。B、これらの神々は、ヒンドゥー教の神格としてではなく、仏教の守護神として渡来したもののだが、それがいつしか日本古来の神々のように、私たちの祖先に受け容れられ、同化してしまっていたのである。それではもうひとつ、大黒天の場合を考えてみよう。

今日、大黒天をヒンドゥーの神さまだ、などと言っても、² すぐには信じてもらえないかもしれない。C 大黒さまは、^{注1} 大黒主命で、日本固有の神さまだと思っていこんでいる人が多いからである。大黒天と大黒主命が同一視されるようになった主な理由は、大黒主命の「大黒」は、音読みでは「大黒」となり、「大きな黒」の「大黒」と読み方が一致していたからだと言われている。

ところが、インドから伝わったものと、大黒天の姿は、私たちが子供のころに唄った大きな袋を肩にかけ、³ 因幡の白兔を助けた、やさしい大黒さまの姿とも、また、戦前の家庭の台所の神棚に鎮座ましましていた、丸いくくり、頭巾に打ち出の小槌を持った、にこやかな福の神の姿とも似ても似つかぬ、恐ろしい忿怒の形相であった。それもそのはず、「大黒天」というのは、ヒンドゥー教三大主神の一つシヴァ神の別名「マハーカーラ」の訳語である。すなわち「マハー」は大きな、偉大なという意味、「カーラ」は「黒い」で、「大黒天」は文字どおり、「マハーカーラ」を直訳したものである。（Ⅳ）

シヴァ神には、吉祥と不祥、破壊と恩恵の D があり、マハーカーラは破壊者としての忿怒の色、黒を表わしたものである。日本に渡来したときのこの神のいでたちを、私たちは密教の曼荼羅の図像で見ることができ、それは激しい怒りで、髪は逆立ち、三面六臂（顔が三つ、腕が六本の中央の顔の第三の眼はかつと見開き、膝に乗せた前の手には剣を握り、中段の左右の手では、それぞれ人間と羊の頭を吊り下げ、後ろの手は象の皮をひろげて背後にかついでいる。首には鬘樓の首飾りをかけ、臂釧（腕輪）に蛇を巻きつけている。この E 形相は、まさにヒンドゥーの神、シヴァ神を髣髴させる。F、われわれの「大黒天」というと、色こそ「黒」だが、姿・形はすっかり大黒主命スタイルの、にこやかな福德の相である。ここでもまた、私たちは完全に日本化されたヒンドゥーの神を見るのである。

さて、大黒天がシヴァ神の別名「マハーカーラ」に由来するインド渡来の神であることはおわかりいただけたかと思うが、「マハーカーラ」には、もうひとつ重要な別の意味がある。「カーラ」には「黒」という意味のほかに、「時・時間・運命・死」などの意味があり、「マハーカーラ」とは、「大いなる時間」ということにもなる。

思えば、時・時間ほど、恐ろしい、確実な破壊者はない。生まれ出たもの、生命あるものは、刃や弾丸、あるいは事故を逃れたとしても、時によって、かならず滅ばされ、死んでゆかなければならない。この意味で、時・時間は物言わぬ破壊者、死の神だと言っても過言ではない。しかし反面、時は新しい生命を生み、はぐくみ、育てる恵みの神でもある。春に萌え出た一本の草花は、夏には生い茂り、秋にはしおれ、そして冬には死を迎えなければならないが、その死は、新しい生命の誕生を約束し、芽吹きを準備するための、いわば自然の自己犠牲である。そして、この G を司るのが、時間カーラである。ここにおいて、恐ろしい破壊の神シヴァと、恵みの神シヴァの二つの顔が、それこそ H、完全に一体化するのである。ヒンドゥー教は、この厳然とした自然のめぐり、宇宙の法則を哲理とし、その哲理の上に成り立った自然宗教である。

（森本達雄『ヒンドゥー教——インドの聖と俗』中央公論新社、二〇〇三年、による）

注1 大黒主命……日本の神話に出てくる神で、出雲大社の祭神。

注2 曼荼羅……仏・菩薩を配置し、宇宙の真理を表した図絵。

問一 空白部 A・B・C・F に入る適当な語を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

A なぜなら イ ところが ウ したがって エ もちろん

問二 傍線部 1 の理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

- A ヒンドゥー教は古来から日本の精神文化の核であり支えであり続けてきたから
イ 現在の日本にもヒンドゥー教に対して抱くような前近代的な側面が残存しているから
ウ 日本人は仏教への影響を通して知らぬ間にヒンドゥー教の神々や教えに親しんでいるから
エ 多くの日本人は遠い異文化圏であるインドに対して強い憧れを抱いているから

問三 傍線部②の理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 日本固有の大黒さまとインド起源の大国主命が同一視されてきたから

イ「大国」と「大黒」の訓読みが一致しているから

ウ 大黒天を日本固有の神さまだと思ってる人が多いから

工 昔の日本人にとっては、日本・中国・インドが全世界だったから

問四 傍線部3からわかることとして適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 戦時中は忿怒の形相をした神さまが増加していた。

イ 戦前の家庭ではにこやかな大黒さまを祀っているところがあった。

ウ 戦前は台所の仏壇にお供え物をしていた。

工戦前は神さまの怒りを鎮めるために台所で頭巾をかぶることが多かった。

問五 空白部Dに入る適当な語を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア
生産性

イ
二面性

ウ 感受性

工必然性

問六 空白部Eに入る適当な語を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア かまびすしい

イ
おくゆかしい

ウ おどろおどろしい

エ
しかつめらしい

問七 空白部Gに入る適当な語句を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 生命のための財産

イ
破壊のための犠牲

ウ 創造のための破壊
エ 自然のための恩恵

問八 空白部Hに入る適当な語句を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 春の夜の夢のように

一枚の硬貨の表裏のように

ウ 運命がらせんを描くように

工 雨が大地をうるおすように

問九 次の文が入る箇所として適当なものを一つ選び、記号をマークせよ。

たとえば、今日ではすっかり日本の民間信仰の神さまのように思われている弁才天信仰などは、その好例のひとつである。

う。

ア
I

イ
II

ウ
III

IV

問十 本文の内容と合うものを次の中から二つ選び、記号をマークせよ。

アヒンドゥー教は世界最古の民族宗教の一つであり、自然や宇宙の哲理の上に成り立っている。

イ 弁才天の起源である「サラスヴァティー」は「大いなる時間」を意味し、河川や湖の霊が神格化されたものである。

ウ 大黒天のにこやかな福德の相は、その起源であつたシヴァ神の破壊者としての姿を髣髴させる。

工 多くの日本人はヒンドゥー教とのかかわりをあまり意識していないが、知らず知らずのうちに少なからぬ影響を受けて

いる。

才室町時代末期から始まった民間信仰である七福神は、インドの神々の中から人気のある七神を選んだものである。

【三】 傍線部1・2・3・4・5にあたる漢字を含むものを下のア～エから一つ選び、記号をマークせよ。

一 両選手の実力が伯チュウウ¹している。

ア 車にチュウイして道を渡る。
イ シュウチュウカが途切れる。
ウ チュウヤが逆転する。
エ チュウカイ者を通じて知り合う。

二 彼のことをアナド²るなかれ。

ア ブジに到着する。
イ ブレゼントをブッシヨクする。
ウ 人心をイブする。
エ 他人からブジヨクされる。

三 私語はツツシ³んでください。

ア シンライ関係を築く。
イ イミシンな発言をする。
ウ シンチヨウに事を運ぶ。
エ シンケンに取り組む。

四 イ口⁴同音につらさを訴える。

ア 先人にイケイの念を抱く。
イ イコクの文化を知る。
ウ 彼の発言にタイはない。
エ コウイ室で着替える。

五 薄ヒヨウ⁵を踏む思いで計画を進める。

ア 新商品がコウヒヨウを博す。
イ 寒さで窓がヒヨウケツする。
ウ この情報はシンビヨウ性に欠ける。
エ 突然の知らせにヒヨウシ抜けする。

国語

一般選抜（2月8日実施分）

●全学部・全学科②（前期日程）

【一】次の文章を読み、後の問いに答えよ。

家族や友人、恋人、サークル、学校、地域、会社など、私たちは実にさまざまな「つながり (relationship)」のなかで生きている。だが、「無縁社会」という言葉に象徴されるように、今日の日本社会では都市部を中心として、つながりが希薄化しているといわれる。確かに、核家族化が進み、個人化が進んでいる。引きこもりや孤独死といった新しい社会的孤立を指す言葉も出てきた。また晩婚化も進み、未婚化も進んでいる。とはいえ、「結婚しなくても幸せになれるこの時代に、私は、あなたと結婚したいのです」という、ある結婚情報誌の広告が多くの共感呼んだように、独りであつても十分に幸せを享受できるのが今の日本社会である。

一方で、90年代の発達なども後押しして、これまでにない新しいつながりが至る所で生まれているのを日常的に目にするようにもなった。希薄化しているのはこれまで主流とされていた種類の「つながり」であつて、つながりの価値や機能そのものが失われたわけではないということだろう。時代が大きく変化しようとも、私たち人間はやはりつながりなくして生きることができないようである。

社会や文化をキーワードに多様な人間集団を研究してきた人類学が古くから注目してきたつながりが、「親族関係 (kinship)」である。親族関係は社会の基礎であるために、多くの研究者がこれまで熱い議論を重ねてきた。そうした研究群は、「親族研究」と呼ばれる。そこでは主に、社会がどう成り立っているのかという

B を問う研究、そして親族関係はどのような

C

A

や、親族関係がどのような働きをもつのかという

もちろん、つながりの種類は親族だけではない。例えば日本社会を対象とした研究では、「タテ社会」と呼ばれる垂直的なつながりに注目した研究も進められてきた。このように人類学は様々な場所につながりを見出してきたが、そこでもやはり、人はつながりなくして生きることができないということが再確認されてきたといえる。

私たちは様々なツールを用いながら、社会が要する一定のフレームワークに準じて誰かとつながっている。つながりの種類は時代とともに変化し、それに応じて機能や意味も変化するが、つながりそれ自体の価値はいつの時代も変わらない。だが私たちはそれぞれに個性をもった「人格 (person)」であるために、どうすれば他者とうまく付き合うことができるかという問いには正解がない。つながりが希薄化する一方で、つながりをもつことが容易になっている現代ではなおさらのことだろう。そんなとき、わたしたちとは異なる文化を生きる人々はヒントを与えてくれる。そこで以下では、わたしが研究する人々のつながり方を見てみよう。

タイ北部で狩猟採集民として生きてきたムラブリは、小規模な社会を形成し、対面的な状況のなかでつながりをもってきた。そんな彼が母語とするムラブリ語には家族に当たる言葉がない。強いて挙げるなら、「一緒にいる集団」と訳される言葉である。しかしこれは婚姻規則といった制度によるつながりではなく、ある時点での状態によって認識されるつながりである。

そんな彼らの人間関係はともユニークである。例えば、わたしの姉と結婚した男性が仕事を手伝ってほしいと頼んできたという。日本社会であれば、わたしにとって彼は「義理の兄に当たる人物だから、手伝うことが道理である」と考える。しかしムラブリはそのようには考えない。彼らはあくまで、自分とその人との関係が良好かどうかに基づいて判断をする。彼らの人間関係が二者間関係 (dyadic relationship) に基礎づけられているからであり、彼らが生きる社会はそうした二者間関係が無数に折り重なることで成り立っているからである。

ところで、ムラブリは時折、「くっつき過ぎてはいけない」と口にする。例えばムラブリでは他民族と結婚することは好ましくないとされるが、ある少女が母親の忠告を無視して、他民族の少年に恋をしたことがあった。そのことを知った母親は怒り、目に涙を浮かべながら娘を不器用に打った。父親はこれをセイカンし、「くっつき過ぎてはいけない」と口にした。

ムラブリ語で「くっつく」とは、「つながりをもつ」ことを指すが、ここで念頭に置かれているのは、少年と少女のつながりではなく、母親と娘のつながりである。そしてこれが否定形で語られる。それは、母親の暴力的なふるまいが、娘に対する過度な干渉だと解されたからである。

顔の見えるほど近い関係にある他者とのあいだに **D** なつながりを覚えることは、自然であり必然である。このことはムラブリも重々承知している。だから彼らも「くっつく」と自体を否定してはいない。しかしそうしたつながりは時に相手への過度な干渉となつて、相手の自由個人の自律性を奪う危険性をはらんでもいる。ムラブリにとって「自由」とは、「ひとりで考え、ひとりで行動すること」であり、これはみんなが守るべき社会の基本ルールとされる。だからこそ、怒りに身を任せて娘に暴力を振るってしまったのは母親が娘の問題に過度に干渉した結果であり、それは娘にも認められた自由の侵犯であると解されたからこそ、「くっつき過ぎてはいけない」と父親は言ったのである。

ところで、絆という言葉を知っているだろうか。「当たり前だろ」と怒られそうだが、問題はその読み方である。おそらくほとんどの人はこれを「キズナ」と読むだろう。しかし「ホダシ」という別の読み方があるのを知っているだろうか。これは「動物をつなぎとめる綱」や「自由を束縛するもの」を指す。つまり絆とは、親密さや **E** を意味する一方で、**F** や束縛を意味する言葉なのである。

ここで改めて確認すべきは、「くっつく」つながりをも「こと自体はとても自然なことだということである。しかしだからこそ、「くっつき過ぎる」という事態が生じてしまう。そんなときにムラブリは「くっつき過ぎてはいけない」と口にする。他者と上手く付き合っていくために、G、と言ふ。相手の自由を束縛することは、自分の自由を束縛することでもある。逆に相手の自由を認めることは、自分の自由を認めてもらうことでもある。

つながる、つながろう、つながりたい。私たちの社会は、つながることで溢れている。とくに東日本大震災以降、キズナという言葉が日本中を席巻し、⁴「絆」はいつしかつながることほとんど変わらない意味しか持たないようになった。つながりがもつ光の部分強調し過ぎるあまり、その影の部分が覆い隠されてしまったようである。

「つながりたい」と欲する背景には承認欲求があるといわれる。⁵その発展と普及に伴って、私たちは承認欲求を解放するツールを手にした。だが、カジヨウなまでにつながりを求める状況は、ある種の病理を生み出している。Facebookの「いいね!」やInstagramのフォロワー数をお金で買う人もいるという。そんななか、「SNS疲れ」なんて言葉も出てきた。つながり過ぎることにヒヤヒヤしている人も少なくないのが今の日本社会である。

そんな状況にあるからこそ、つながりとは何か、つながるとは何かを改めて考えてみる必要があるのではないだろうか。「キズナ中毒」にある今日を生きる私たちに必要なのは、絆の二面性キズナ／ホダシを理解しながら、他者との適切なつながり方を模索することだろう。もちろん、言うは易く行うは難しである。そんなとき、「つながり過ぎない」というムラブリの実践的なつながりのあり方は、つながるとは何かという問いを考える上でとても重要な手がかりになるように思える。

（二文字屋脩『ふたつの絆 つながらないとダメですか?』『ダメになる人類学』所収、北樹出版、二〇二〇年、による）

問一 傍線部2・6・7を漢字に改め、4・8の読みを記せ。

問二 空白部A・B・Cに入る適切な語を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 構造 イ 義務 ウ 象徴 エ 機能

問三 傍線部1の説明として適切なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア つながりそれ自体の価値が以前にも増して高くなっているということ
イ つながりの種類が以前にも増して多種多様化しているということ
ウ どのようにしたら他者とうまく付き合えるかわからなくなっているということ
エ どのようにしたら個性を持った人格として振る舞えるかわからなくなっているということ

問四 傍線部3の内容として適切なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 娘が他民族の少年とつながりを持つてはいけないということ
イ 母親が自分の娘とつながりを持ち過ぎてはいけないということ
ウ 父親が母親に、暴力はよくないと言ったということ
エ ムラブリの社会では「くっつく」が「つながりをも」を意味しないということ

問五 空白部Dに入る適切な語を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 支配的 イ 情緒的 ウ 扇動的 エ 概念的

問六 空白部E・Fに入る適切な語を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 拘束 イ 収束 ウ 紐帯 エ 帯同 オ 束帯

問七 空白部Gに入る適当な文を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア つながりをなによりも大事にせよ
イ まず自分より相手の自由を認めよ
ウ いつでも他者とは自然体で接せよ
エ 他者との適切な距離感を再確認せよ

問八 傍線部5の内容として適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 「絆」という言葉は、親密さと束縛以上の意味を持つようになっているということ
イ 「絆」は他者との親密なつながりを意味し、束縛を意味しなくなっているということ
ウ 「絆」の束縛という光の部分だけでなく、親密さという影の部分にも目を向けるべきだということ
エ 「絆」は、ムラブリの社会ではつながりを意味し、「くっつき過ぎる」ことを意味しないということ

問九 本文の内容と合わないものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 今日の日本社会でのつながりは希薄化しているとも言われるが、つながりの価値や機能そのものが失われたわけではない。
イ ムラブリ語には「家族」を意味する言葉がなく、これに近いものとしては「一緒にいる集団」という言葉がある。

ウ ムラブリにとつての「自由」は「ひとり」で考え、ひとりで行動することであり、これは子供であっても例外ではない。
エ 「絆」には「キズナ」の他に「ホダシ」という読み方があるが、後者は社会におけるつながりの変容とともに生じた。

二 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

日本人の自然との向きあい方に関して重要な示唆を与えてくれるものに寺田寅彦の「日本人の自然観」というエッセーがある。寺田は著名な物理学者であったが、俳句にも親しみ、秀逸な随筆を数多く残したことも知られる。このなかで寺田は次のように記している。「日本の自然界が空間的にも時間的にも複雑多様であり、それが住民に無限の恩恵を授けると同時にまた不可抗な威力をもつて彼らを支配する、その結果として彼らはこの自然に服従することによってその恩恵を充分に享受することを学んで来た、この特別な対自然の態度が日本人の物質的ならびに精神的生活の各方面に特殊な影響を及ぼした」ということが言われているが、具体的に日本人の「特別な対自然の態度」がその物質的・精神的な生活にある特殊な影響を及ぼしたということが言われているが、具体的にどのようなことであろうか。

日本では人々は自然の威力に対処するために、経験から必要な知識を集め、蓄積していった。そのことによって多くの恩恵を享受してきた。A 自然を科学的な方法で分析し、普遍的な法則を発見することはしなかった。自然は分析の、あるいは研究の対象ではなかったのである。それは言い換えれば、観察され、分析される「自然」(nature)が生まれなかったということである。人間とともにある山川草木は存在したが、自然科学の対象となる「自然」は存在しなかった。人々はむしろそれと一体になって生きてきた。自然は分析ではなく、共感の対象であった。あるいは畏怖の対象であった。

『万葉集』においても、自然は美しいだけでなく、「神々しい」ということばで表現されるようなB をもったものであった。そのなかに吉野を詠んだ次のような歌がある。「神さぶる岩根ごしきみ吉野の 水分山を見れば悲しも」(巻七・一一三〇)。神々しいほどに岩のごっこつしている吉野の水分山を見ると、切なる思いが込みあげてくるというような意味であろう(「み吉野」は吉野地方の美称)。

また高橋虫麻呂に次のような歌がある。「富士の高嶺は 天雲も 行きはばかり 飛ぶ鳥も 飛びも上らず 燃ゆる火を 雪もて消ち 降る雪を 火もて消ちつつ 言ひも得ず 名付けも知らず くすしくも いまず神かも」(長歌の一部、巻三・三一九)。富士の高い山は、雲も進むことをためらい、鳥も飛び上がることができず、燃える火を雪で消し、降る雪を火で消してしまふような、ことばで言い表すことも、名付けることもできない、霊妙な神であるという意味であるが、ここでは「くすし(奇し)」、C 人間にははかりしれないという意味のことばで神が形容され、富士の美しさが表現されている。

古代の人々は自然のなかに美しさとともに、²神威とも言うべきものを認め、畏れ、敬ってきた。それに祈りをささげてきたと言ってもよい。このように自然は詩歌のなかで、くり返し共感の対象として、D 畏怖の対象として詠われてきたのであるが、哲学のなかではそれはどのように論じられてきたであろうか。それを以下で見ることにしたい。

それを見る前に、まず「自然」ということばがどのように使われてきたのかを見ておきたい。

先ほど、日本には観察され、分析される「自然」(nature)が存在しなかったと言ったが、もちろん古代の人々にとっても「自然」にあたるものは存在していた。それらは天地や山野、山河、乾坤、造化など、さまざまな言葉で表現された。

しかし「自然」ということばがなかったわけではない、それも使われた。ただ、nature という意味においてではなかった。それは最初「おのづから(おのずから)」と読まれた。中国でももともとは「自然」は「自ら、おのづから」を意味する副詞ないし形容詞として用いられた。たとえば『老子』第五章では、万物の根本原理である「道」について次のように言われている。「道の尊く、徳の貴きは、それ之に命ずる莫くして、常に自然なり」。道の尊さとその徳の高さは、誰かがそうさせるのではなく、いつもおのづからそうなのである、という意味であろう。

日本での古い用例としては『万葉集』の「山辺の五十師の御井は自然成れる錦を張れる山かも」(巻一三・三三三五)という歌を挙げることができる。伊勢の国の山辺の五十師の原の御井は、おのづからできあがった錦を張ったような山のような意味であるが、ここでは「それ自身の力によっておのづから」という副詞として「自然」ということばが使われている。

「自然」は「じねん」とも読まれた。漢字の読み方には、六世紀ごろに百済を経由して伝わった呉音と、七、八世紀に遣唐使たちによってもたらされた漢音とがあるが、「じねん」は前者にもとづく。仏教では伝統的に呉音に基づく読み方がなされてきた。また文学作品でも「じねん」ということばが使われている。E、『源氏物語』第二帖「帚木」に「人の品高く生まれぬれば、人にもてかしづかれて、隠るる事多く、じねんに、そのけはひ、こよなかるべし」という文章がある。人にかしづかれて成長すると、人目に付くことが少なく、おのづからその雰囲気やふるまいが格別なものになるというのである。

「自然」には「しぜん」という読みも古くからあったようで、平安時代末期に成立した辞書である『色葉字類抄』では「しぜん」と「じねん」という読みが記されている。江戸時代前期に書かれた仏教書にも、「自然」はこの二つの読みがあり、「おのづから」という意味の場合には「F」と呉音で読み、「もし、万一の場合」という意味の場合には「G」と漢音で読むという記述がある。『平家物語』巻第七「門都落」のなかにも、「H」の事候はば、「平」頼盛かまへて助けさせ給へ」(もしものことがあれば、頼盛をぜひともお助けください)という表現が見える。

「自然」が「もし、万一の場合」という意味ではなく、山や川、草や木、天候など、人間の力とは関わりなく存在している物や現

象を指すことばとして使われるようになったのは、西洋語の nature(オランダ語)や Natur(ドイツ語)、nature(英語)などが日本に紹介されてからのことになる。江戸時代に作られた日本で最初の蘭和辞典である『波留麻和解』でも nature に「自然」という訳語が当てられている。

しかしすぐにその意味でこの「自然」ということばが使われたわけではない。明治時代になっても「天地」や「万物」、「I」といったことばが多用された。明治時代の中頃になってようやく「自然」が自然界に存在するすべてのものを指すことばとして使われるようになっていった。

(中略)

いま「自然」が自然界に存在するすべてのものを指すことばとして定着していったのは明治時代の中頃のことであったと言ったが、江戸時代にすでに「自然」ということばを独自の意味で用いた思想家がいた。秋田の豪農の家に生まれ、医師として生涯を送った安藤昌益である。その主著『自然真営道』のなかでオリジナリテイあふれる「自然」論を展開したが、その思想は長いあいだ忘れ去られていた。明治時代に入ってその草稿が発見されて、あらためて注目されるようになった人である。

昌益の「自然」理解の特徴はそのことばの使い方にも現れている。昌益はそれを「しぜん」と読み、従来のように副詞ないし形容詞としてだけでなく、名詞の形でも用いた。「自然」は、昌益独自の用語である「活真」とも深く結びついている。「自然」は昌益によれば動き、変化してやまないものであるが、その運動・変化を支えているのが「活真」、「活きて真」なるものである。この「J」の変転を支える内面的エネルギーとも言うべき「K」がさまざまに運動し、活動した結果がいわゆる万物であり、「L」である。それは外から与えられた刺激によって変化するのではなく、その内部にあるエネルギーによって自己自身を形成していく。「自然」は「自り然る」のである。このように動詞の形で「自然」ということばが用いられている。

もう一つ、昌益が重視するのは「互性」という概念である。この世界には、互いに関わりあい、対をなすものが存在している。「天と地」「明と暗」「男と女」「生と死」などである。それらが互いに作用しあうことによって、場合によっては反発し、場合によっては引きあうことによって、この世界のなかにさまざまものが生みだされていく。この対をなすもののあいだには、いっさい上も下もなく、尊も卑もない、互いに支えあい、補いあっている「男女」を「ヒト」と読ませている箇所がある。その関係を昌益は「互性」と言い表したのである。

以上のような理解の上に立って、昌益は上下、尊卑などの区別・差別を否定した。また、そのような考えに基づいて「自然の世」こそが理想の社会であると説いた。「自然の世」とは、すべての人が直接田畑を耕し作物を作って——それを昌益は「直耕」と表現した——暮らす社会である。一部の人が、自らは耕さず、他の人が作ったものを力で奪うことによって成り立つ作為された社会、「こしらえられた社会、つまり「法世」を昌益は批判した。⁴「自然」の理解が社会批判にもつながっていたところに昌益の思想の特徴がある。

(藤田正勝『日本哲学入門』講談社、二〇二四年、による)

問一 空白部 A・C・D・E に入る適当な語を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア たとえは イ しかし ウ つまり エ あるいは

問二 傍線部 1 の内容として適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 自然の威力に屈せず破壊し食い物にしようとする態度
イ 自然を科学的な観察や分析の対象とみなす態度
ウ 自然の威力に服従することで恩恵を受けようとする態度
エ 自然を脅威とみなし制圧することで恩恵を受けようとする態度

問三 空白部 B に入る適当な語を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 具体性 イ 神秘性 ウ 現実性 エ 抽象性

問四 傍線部 2 の内容として適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 人間には持たえない神への信仰のようなもの
イ 人間が対峙し征服すべき神の権威のようなもの
ウ 人間が克服すべき神の威厳のようなもの
エ 人間にははかりしれない神の威光のようなもの

問五 空白部 F・G・H に入る語の順序として適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア じねん——しぜん——自然 イ しぜん——じねん——自然
ウ じねん——しぜん——自然 エ しぜん——じねん——自然

問六 空白部 I に入る適当な語を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 文化 イ 造化 ウ 進化 エ 俗化

問七 傍線部3の内容として適当でないものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

- ア 「自然」を絶えず動き、変化していくものとして捉えた。
イ 「自然」を「じねん」と読み、仏教的な価値を表す概念として捉えた。
ウ 「自然」を内部のエネルギーにより自己形成していくものとして捉えた。
エ 「自然」を副詞や形容詞としてだけではなく名詞や動詞としても用いた。

問八 空白部J・K・Lに入る語の順序として適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

- ア 自然——活真——活真
イ 活真——自然——自然
ウ 自然——活真——自然
エ 活真——活真——自然

問九 傍線部4の説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

- ア 一部の人が富が集中する現実社会の在り方を「自然の世」として理想化し、そうした支配構造が解消された平等な社会の在り方を「法世」として批判した。
イ 上下や尊卑などの区別・差別が厳然として存在する現実社会を「自然の世」として批判的に捉えることで、作爲的にこしらえられた平等な社会を「法世」として理想化した。
ウ すべての人が直接田畑を耕し作物を作る平和な社会を「自然の世」として肯定的に捉え、それを維持していくために必要な法制度を備えた社会を「法世」として理想化した。
エ すべての人が田畑を耕し作物を作る平等な社会を「自然の世」として理想化することで、一部の人が作物を力で収奪する不平等な社会を作爲された「法世」として批判した。

問十 本文の内容と合うものを次の中から二つ選び、記号をマークせよ。

- ア 日本には近代に至るまで自然科学の対象となる「自然」は存在せず、また「自然」という言葉自体も存在しなかった。
イ 古代の日本では『万葉集』の歌にみられるように自然は共感の対象であると同時に畏怖の対象として捉えられていた。
ウ 安藤昌益の「互性」とは、世界に存在する「天と地」「明と暗」などの対をなすものの上下関係を重視する概念である。
エ 『源氏物語』には異音に基づく「じねん」が自ら、おのずから」を意味する言葉として使われている例が確認できる。
オ 「自然」が自然界に存在する全てのものを指す言葉として一般化したのは、西洋語が輸入された江戸時代のことである。

【三】 傍線部1・2・3・4・5にあたる漢字を含むものを下のア～エから一つ選び、記号をマークせよ。

一 様々な文献をシヨウ胤する。

- ア 論よりシヨウコ。
イ 値下げのコウシヨウを行う。
ウ 交通のヨウシヨウとして栄える。
エ ショウソウ感に駆られる。

二 米不足解消に向けて対策をコウじる。

- ア 大学のコウギを受ける。
イ 文章をスイコウする。
ウ 勢力のキンコウを保つ。
エ コウゾウ上の欠陥を指摘する。

三 彼は偏キヨウな性格だ。

- ア 前後から敵をキヨウゲキする。
イ クツキヨウな肉体の持ち主。
ウ 恵まれたキヨウグウで育つ。
エ キヨウシヨウ住宅に住む。

四 日本文化のイシズエを築く。

- ア バンジャクな体制を整える。
イ コンボンテキな誤りを正す。
ウ 宮本武蔵は二刀流のガンソである。
エ キソから練習する。

五 意見をヒルガ工す。

- ア フクスイ盆に返らず。
イ 洋書をホンヤクする。
ウ 上下がハンテンする。
エ シュウカイ遅れで負ける。

国語

一般選抜（2月9日実施分）

●全学部・全学科③（前期日程）

【一】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

江戸は東京と名を変え、元号も明治と改められました。一八六八年九月八日のことです。西洋文明が怒濤のごとく押し寄せてきます。日本は西洋諸国に比べて、見るも無惨なほど遅れてしまっていました。

西洋諸国の文章を見ると、表音文字のローマ字を使って、話す通りに自在に文章を書いています。それに比べて、日本はどうだ。話す言葉と文章に書く言葉があまりにも違いすぎる。早急に、「言」（「話し言葉」と「文」（「文章に書く言葉」とを一致させなければならぬ。

だが、一体それは、どのようにして実現していけばいいのか。言うはやさしく、行なうは難しい。この章では、言文一致を成し遂げていく過程に焦点を当てて、近代語の成熟に迫っていきます。

書き言葉に注目する前に、話し言葉についても目くばりをしておきましょう。前の章でみたように、江戸語が、現在の共通語に継承されていきました。けれど、それは現在から過去をふり返るので分かる筋道です。歴史のただなかに放り込まれている人間にとっては、どちらに進むのか分からないものです。

明治の新政府も、近代的な統一国家をつくりあげるために、身分制度をハイシ²し、日本全国に通用する話し言葉をただちに作らなければならないことだけは、分かっていました。A、江戸時代には、領民は領地に縛られ移動が許されなかったもので、その領内でしか通じないような言葉を話すようになってしまっていたのです。異なる領地の者同士のコミュニケーションができなくなっていました。国家を統一するには、日本のどこでも通用する話し言葉の制定がまず何より必要です。（Ⅰ）

でも、どうしても、そのような日本語を定められるのか。明治政府は、頭を抱えていたのです。ある一地方の言葉を基準にすれば、その他の地方の不満は高まる。だからと言って、どの地方からも不満の出ない共通語なるものを短時間に作り上げることが、至難。

実際には、どこかの地方の言葉を基準にするしか方法はあるまい。だとしても、一体どの地方の言葉を基準にしたらいいいのか。新政府でシュドウケン⁴を握っている薩摩藩の薩摩弁や長州藩の長州弁にすべきなのか。B、東京府の治安を守る巡査の大半は、薩摩出身者。薩摩弁が勢力を誇っている。それらを無視して、江戸語の系譜を引く東京の言葉を基準にしてもいいのか。

この時の日本の迷いと苦しみを戯曲化したのが、この本の冒頭に記した井上ひさしさんの「国語元年」です。時の政府の苦悩の一端がにじみ出ており、なかなか考えさせる戯曲です。

多くの知識人たちは、江戸語を踏襲した東京語を日本の共通語にするのが良いと考えていました。渡辺修次郎は、『郵便報知新聞』で、こう言っています。どこの地方の言葉が良い悪いなどと論じる必要はなく、「最も能く通用する東京言葉を本として」言語の統一を図ればいいのだと。矢田部良吉も「先ず東京の如き大都会の音声^{注5}を以て標準とし」と述べ、東京語を標準にすべきだと主張しています。後に触れるローマ字会も、「教育を受けたる東京人の間に行はるる発音を以て「標準とする」と述べています。

「標準語」という名称を最初に使ったのは、岡倉田三郎^{注7}です。彼は、明治三年『日本語学一斑』のなかで、明言しています。社会変動によって他を凌ぐにいたった言語がただちに、「標準語の位置を占め」、その他はすべて方言となり果てる以外にない。と。C、明治二年、上田万年^{注8}は、「現今の東京語」こそが標準語たる資格をそなえていることを確信していると述べています。万年は、「東京語」というのは、「教育ある東京人の話すことば」だと規定しているのですが、こんな重要なこともあわせ述べています。ちよつとそこだけ引用してみます。

東京語といへば、或一部の人は、直に東京の「ペランメー」言葉の様に思ふべけれども、決してさにあらず。予の云ふ東京語とは、教育ある東京人の話すことばと云ふ義なり。

（標準語に就きて「明治二年一月、『帝国文学』一号」）

この万年の発言から、「東京語」というと、「オメー」「イデー」式の江戸語の特色を引いた下町言葉を意味すると考える人が当時結構たくさんいたことが分かりますね。「東京語」と一口に言っても、武士や知識人の使っていた山の手言葉の系統と「ペランメー」口調といわれるような下町言葉の系統があるのです。万年は、「標準語」としては、山の手言葉に軍配を上げています。「一国の標準語となるには」、それにふさわしい品格が必要だと考えていたのです。乱暴だけれど、飾らない人情の溢れる下町言葉は、果たしてどうなるのでしょうか？

明治三五年（一九〇二年）になると、政府は文部省の国語調査委員会で「方言を調査して標準語を選定する」という方針を打ち出しています。翌三六年（一九〇三年）には、最初の国定教科書『尋常小学読本』^{注9}を出しています。そこでは、主に東京の中流社会に行なわれている言葉を採用しています。（Ⅱ）

大正二年（一九一三年）、国語調査委員会は『口語法』を公にし、話し言葉の決まりを決定。そこに、こんな意味のことが記されています。

今日、話し言葉は地方によってまちまちで一致していない。そこで、この書は、主として東京で教育ある人々の間で使われる話し言葉を標準とすることにした。地方の話し言葉であっても、広く一般に用いられているものは、許容範囲とした。

話し言葉の標準は、上田万年が規定したのとはほぼ同じ。「東京で教育ある人々の間で使われる言葉」です。つまり、山の手言葉です。下町言葉は、標準語のルートからはずされ、以後その力を失っていきます。

D⁷、現代日本語の話し言葉の基本線が確定していきました。明治の新政府になってから、四五年も経過、東京語が話し言葉の標準と認められるまでに、半世紀もかかってしまったのです。(Ⅲ)

太平洋戦争終結後、「標準語」という言い方は、問題視されました。標準となるべき言語ということで、純正で正しい日本語、という規範的なものを感じさせるからです。そして、それは、標準語以外の方言などを認めないという、⁸ハイタ的な姿勢に連なっているからです。(Ⅳ)

「E」と呼べるような理想的な言語など存在しません。存在するのは、日本全国に通じる「F」なのです。そこで、「G」という言い方を改めて、「H」と呼ぶようになりました。方言の存在を認めつつ、統一的な国語教育を行なおうという方向に転換したのです。

(山口仲美『日本語の歴史』岩波書店、二〇〇六年、による)

注1 この章……本書の第五章「言文一致をもとめる―明治時代以後」を指す。

注2 前の章……本書の第四章「近代語のいぶき―江戸時代」を指す。

注3 井上ひさし……小説家・劇作家(一九三四～二〇一〇)。

注4 渡辺修次郎……啓蒙思想家(一八五五～没年不明)。

注5 矢田部良吉……植物学者・詩人(一八五一～一八九九)。

注6 ローマ字会……一八八四年に、矢田部良吉・外山正一らにより設立。日本語を表記するための文字として、ローマ字を使用するべきであると主張した。

注7 岡倉由三郎……英学者(一八六八～一九三六)。

注8 上田万年……国語学者(一八六七～一九三七)。

注9 図19……『尋常小学読本』のページが本文に図として付されているが、ここでは省いた。

問一 傍線部1・6の読みを記し、2・4・8を漢字に改めよ。

問二 空白部A・B・C・Dに入る適当な語句を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア こうして イ とりわけ ウ 続いて エ というのは

問三 傍線部3の理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア どこかの地方の言葉を基準とするしか方法はないが、一地方の言葉を基準にすると、その他の地方の不満が高まるのは不可避であるから

イ どこかの地方の言葉を基準とするしか方法はないが、選択肢はあまりにも多く、どれか一つの言葉に決めるのは困難であるから

ウ 明治新政府では薩摩出身者が多く、薩摩弁が勢力を誇っているが、全国的にみると話者数の少ない言葉であり、基準とするには不十分であるから

エ 話者数は東京語が最も多いが、明治新政府では薩摩弁・長州弁が勢力を誇っているため、両者を差し置いて東京語を基準としてよいのか、判断が難しいから

問四 傍線部5のような主張として適当でないものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 渡辺修次郎は、社会一般に最も通用する東京語を基本とするべきであり、他地方の言葉を比較して論じる必要はないと主張している。

イ 矢田部良吉は、東京のような大都会で話されている言葉を基準とするべきであると主張している。

ウ 岡倉由三郎は、社会変化により、社会的に優位に立った言葉を標準語とし、その他の言葉はみな方言になると主張している。

エ 上田万年は、下町言葉や山の手言葉といった東京語を標準語とするべきであると主張している。

問五 傍線部7の内容として適当でないものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 江戸時代に、武士や知識人階層が使用していた言葉の系統を標準語とした。

イ 東京語には山の手言葉と下町言葉があるが、下町言葉は品格に欠けるとして、標準語とはならなかった。

ウ 国語調査委員会が示した話し言葉の標準は、上田万年の「標準語に就きて」における主張とおおむね一致している。

エ 東京語以外の地方の話し言葉は、使用するべきではないとして、排除する姿勢をとった。

い。それでも原著者が訳者や出版社に抗議することはほとんどない。古典であれば、そもそも抗議したくとも著者は他界している。

「超訳」と称する捏造翻訳は問題外としても、「わからないのは読者の勉強不足」といわんばかりの悪文翻訳は、本来は翻訳の名に値しない。中でも思想・哲学分野の翻訳には、原文との一語一語対応を **H** 守り、ほとんど禁欲的といってもよいほどの逐語訳に徹する傾向が、いまだに根強く残っている。

原文が長すぎるなら、ぶつ切りにして読みやすくすればよい。決まった訳語があるからといって、必要以上に拘泥する必要はない。ドイツ語で *problematisch* とくれば、多くの訳者が **I** 問題的 などと訳すが、文脈によっては「やっかいなでもよいし、時には「筋縄ではいかない」などと工夫してもよい。通常の日本語では、「それは問題だね」とは言っても、「それは問題的だね」とは絶対に言わない。特殊なテクニカルチームならともかく、こうした表現レベルにまで辞書の訳語が浸透している一例だ。

この種の訳文を読んで育った学生たちは、やがて自分の論文でも「官僚制度の持つこのような問題的な性格は」などと書くようになる。しかも「丁寧に」、「問題的」などとルビをふる。これこそ銜学趣味以外のなものでもない。というのも *problematisch* は「いろいろ問題があつてやっかいな」といった程度の意味にすぎず、特別にドイツ語を引用しなければわからないような類の言葉ではないからだ。

逆にいえば、このレベルで訳文を工夫していくだけでも、現在の翻訳は今よりずっと読みやすいものになるはずだ。しかし、原書の一文は一文として、一語は一語として、辞書の訳語通りに翻訳するという原則を守っている翻訳は現在でも少なくない。おそらくそこには、原書の構文や単語の改変を強く抑制する何かが働いているに違いない。

その何かとはいったい何なのか。しかもこうした翻訳がなぜ今に至るまで、市場から見放されることなく命脈を保ってきたのか。この種の翻訳は、たとえどんなに不可解であっても甘受すべきだと読者は信じこまされてきたのだろうか。わけのわからない文章に接した読者は、翻訳の不適切さを疑う以前に、難しい本が読みこなせない自分の無知を恥じ、自分の怠惰を責めるように仕向けられてきたのだろうか。もしそうであるならば、それは文化に潜む一種の暴力であり、それが暴力だと意識されない点で、いっそう深刻な問題をはらんでいるのではないか。こうした疑問が沸々とわいてくる。

本書は、これらの疑問に対するささやかな回答の試みとして書かれた。

J これは、いわゆる外国語の達人が世に流布する悪しき翻訳を叱る、といった類書とはまったく異なる。私自身、外国語の達人とはほど遠く、とても他者の翻訳をあげつらう立場にはない。（**I**）

私が問題にしたいのは、個々の訳者の力量とは別の次元で、この国の思想・哲学書の翻訳と受容を拘束してきた、いわば暗黙の共通了解の方だ。それは言葉のもっとも広い意味での「**K**」であり、もしそう言いたければ思想・哲学翻訳の「**ディス**クール」といってもよい。

翻訳書の読みにくさに辟易して、さっさと放り出した人には、この制度はそれほど大きな傷跡を残さない。その影響をもっとも深く受けるのは、禁欲的にその困難に立ち向かった一部のまじめな人々だ。そしてほかでもないその競争の勝者たちが批評家となり、大学教員となり、次世代の読書層を育てていく。彼らは無意識のうちに、かのディススクールのみならず、禁欲の果実たる「権威主義」をも再生産し、それによって、自由に問題を考え、表現しようとする若い世代の知的冒険心をくじき、人文社会科学への参入障壁を高めてきた可能性がある。（**II**）それはまた大学受験を基盤とした語学教育に、あるいは辞書の使用法に、読書の仕方に、あるいは読書離れに、ひいては外来思想の選別的受容や「とげ抜き」にも一役買ったかもしれない。

本書では輸入学問の功罪のうち「功」の部分については、あまり多くのページを割いていない。これはもちろん、その部分を私が認めていないからではない。（**III**）あらためてここで「罪」の部分に光を当てる作業は、他でもないこの「功」の部分が、いかに多くの犠牲の上に築かれてきたものであったかを思い出すためののだ。

（鈴木直「輸入学問の功罪——この翻訳わかりますか？」筑摩書房、二〇〇七年、による）

注1 著者はこの前に「市場による切磋琢磨」について述べている。

注2 今……本書は二〇〇七年刊行である。

注3 ディスクール……discours（フランス語）。言説。話法。

問一 空白部A・F・Jに入る適当な語を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア しかし イ ただし ウ だから

問二 傍線部1は、どのようなことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号をマークせよ。

ア 必要なものとして選別する力 イ 必要なものとして優遇する力
ウ 必要なものとして焼却する力 エ 必要なものとして消費する力

問三 空白部B・C・Dに入る適当な語を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 流動化 イ 愚民化 ウ 民主化

問四	空白部 E・G・H・I に入る適当な語句を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。	
ア	必要悪のように	イ 判で押したように
ウ	甘えるように	エ 金科玉条のように
問五	傍線部 2 の意味として適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。	
ア	学識を減退させる	イ 学識で人をまどわす
ウ	学識をひけらかす	エ 学識をゆがめて伝える
問六	傍線部 3 の意味として適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。	
ア	距離を感じて	イ かたよりを感じて
ウ	がつくりして	エ うんざりして
問七	空白部 K に入る適当な語を本文の次の段落から二字で抜き出して記せ。	
問八	次の文が入る箇所として適当なものを一つ選び、記号をマークせよ。	
非西欧圏での急速な近代化を支えたものとも大きな柱がこの翻訳文化にあったことは疑いえない。		
ア I	イ II	ウ III

〔三〕 傍線部 1・2・3・4・5 にあたる漢字を含むものを下のア～エから一つ選び、記号をマークせよ。

一	これまでの議論を総 ¹ カツする。	ア 人々は平和をカツボウしている。
イ		イ 会議でカツバツな意見交換を行う。
ウ	コウカツな手段で相手を出し抜く。	エ 引用箇所はカツコに入れて示す。
二	成功の可能性はカイ ² 無に等しい。	ア 小学校時代の旧友と街でカイコウした。
イ		イ 同じ過ちを繰り返し返さないようジカイする。
ウ	彼は入社以来 3 年間カイキンだ。	エ 父親の病気がカイユした。
三	不足した栄養をセツ ³ 取る。	ア 自然のセツリに従わなければならない。
イ		イ 春は氣候が朗らかなキセツだ。
ウ	学園祭のステージをセツエイする。	エ 他人の所有物をセツシュするのは犯罪だ。
四	賛否が拮 ⁴ コウする。	ア この先にはキユウコウバイの坂がある。
イ		イ 法律はときに自由をコウソクする。
ウ	ライバルにタイコウシンを燃やす。	エ この料理はジコウの味だ。
五	学校の正門は閉サ ⁵ されていた。	ア 先生の話はシサに富んでいる。
イ		イ 問題がないか細かくケンサする。
ウ	貧困のレンサを断ち切る。	エ 他の商品とのサベツカが必要だ。

【一】次の文章を読み、後の問いに答えよ。

ラテン語という言語があることを初めて知ったきっかけは何でしょうか。クラシックの音楽曲？博物館などで目にする学名？『テルマエ・ロマエ』のようなマンガやアニメ？『ヴァチカンのエクソシスト』のような映画？

多くの人は中学や高校の世界史の授業でぼんやりと耳にしていることかと思いますが、ラテン語を意識するきっかけは他にも小説やエッセイの中の言及や、フランス語やスペイン語を学び始めるときに学ぶ語史など、さまざまでしょう。

私自身について言えば、小説の中でたびたび目にしていたものの、明確に意識したのは大学の図書館で見かけた、教会によってキンシヨ指定された魔術書のホウヤク本の原文がラテン語だったという、今では気恥ずかしいきっかけだったりします。

いずれにせよ、ラテン語といえば古代ローマで用いられていたとか、ローマに本拠地を置くキリスト教(カトリック)に何か関係しているヨーロッパの言語という感覚が A かと思います。

ラテンとは元来、現在のイタリア中央西部地方、つまりローマを含む地域の総称であるラティウム(Latium)に由来します。で、この感覚はあながち間違いではありません。「ラティウムの」を意味する形容詞はラティヌス(Latinus)で、リングウア・ラティーナ(Lingua latina)、つまりラティウムの言葉がラテン語ということになります。

このラティウム地方に住んでいた人々は勢力を拡大し、支配領域を駆け、やがて広大なローマ帝国を築く⁴に到ります。

ローマ帝国の最大領土はトラヤヌス帝(在位：98―117年)の時代で、時計回りに北はアイルランドをノゾ⁵いた現在のイギリスのスコットランド以南、ドイツのケルン、オーストリアのウィーン、ルーマニア、トルコの黒海沿岸部、イラン、イスラエル・パレスチナ地方、紅海沿いのエジプト、地中海沿岸の北アフリカ一帯、そしてイベリア半島に到る広大なものであり、その公用語がラテン語でした。

次章以下でまた改めて述べますが、このラテン語から派生した直接の子孫にあたる言語がイタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語などのいわゆるロマンス諸語です。

しかし、「ラテン」と聞いて、今私たちが真っ先に思い浮かべるのはラテン・ミュージックやラテン・アメリカのように、中南米の国々とその文化ではないでしょうか。ラテン語の子孫にあたる言語が用いられているイタリアやフランスの音楽がラテン・ミュージックと言われないのはなぜでしょうか。

ラテン・アメリカにおけるラテンは、南北アメリカ大陸の中でもラテン語の子孫である諸語を用いる文化圏を意味します。

15世紀末頃のいわゆる大航海時代における新大陸の発見以降、主に北アメリカではイギリス系の植民者が支配領域を広げますが、やがて独立戦争を経てアメリカ合衆国の建国に到り、かくして英語を主要言語とする文化圏が確立することになります。

これに対して南アメリカでは、スペインおよびポルトガルが主要なセイフク者であり、植民者でした。18世紀末以降、それぞれの地域が国家として独立し、旧スペイン領と旧ポルトガル領をあわせた地域がイベロ・アメリカと呼ばれるようになり、現在でもこの呼称は用いられています。

これらの地域や文化圏についてラテン・アメリカという呼称が使われるようになったのは1980年代のことでした。

メキシコおよび中南米への影響力拡大を目指したフランスが自らの進出を正当化するために、イベリア半島にあるスペインおよびポルトガル系のアメリカを意味するイベロ・アメリカではなく、フランス語にとつても共通の先祖であるラテン語文化圏を意味するラテン・アメリカという呼称を用い、これが現地知識人層に受け入れられ、次第に定着して現在に到ります。

ここには現在のイギリス人の主な祖先であるアングロサクソン人のアメリカを意味する北アメリカのアングロ・アメリカに対して、中南米諸国の文化圏が異なったものであるという対抗意識がガ⁷ンイされていることがしばしば指摘されており、例えばアングロ・アメリカではプロテスタントが、ラテン・アメリカではカトリックが B 基盤になっていることなどが両者の文化的違いを形成する代表的要素として認識されていたりします。

英語を主要言語とするアングロ・アメリカに対して、ラテン語を共通の先祖として持つ諸語を主要言語とする諸国家がラテン・アメリカとして C な自意識を持つことができたのはなぜでしょうか。もちろんそれぞれの地域における歴史的、文化的背景が重要な要素となっていることは言うまでもありませんが、歴史や文化を紡ぐ基盤となる言語が英語とラテン語では異なる語派(言語分類における語族の下位分類)に属しているということも見逃せません。

スペイン語やポルトガル語、それにフランス語の母体となった言語がラテン語であるように、ラテン語にも母体となった言語が存在します。

紀元前3000年から2000年頃というあまりに古い時代であるために文字資料が残っておらず、どのような言語であるかは D に推測するしかないこのインド・ヨーロッパ祖語を母体として、ギリシア語やラテン語、サンスクリット語やゲルマン祖語、スラブ祖語などが生まれ、枝分かれしていったものと考えられています。

英語やドイツ語はゲルマン祖語を母体とする言語ですので、英語はラテン語から見ればいわば E にあたり、スペイン語やフランス語から見るなら F にあたる言語ということになるわけです。

では、ラテン語と英語はほとんど関係ない言語なのでしょうか。言語学的な関係性はさておき、英語がラテン語からの強い影響のもとに記述言語として成立し、発展してきたことは明らかであると言えます。その最もわかりやすい影響が、使用している文字でしょう。

ラテン語と言語学的に姉妹関係にあるギリシア語はギリシア文字を、サンスクリット語はブラーフミー文字(日本で馴染み深いものは梵字^{ぼんじ})を用いますが、ラテン語と英語は語派が異なるにもかかわらず同じラテン文字を用います。

これはもともと文字を持たなかったアングロ・サクソン語(古英語)が文字による記述を必要とするようになったときに、すでに広く用いられていたラテン語の文字を転用したことによるものです。私たちは G に英語の文字について「英語のアルファベット」とか、たんに「アルファベット」と呼んだりしますが、アルファベットという言葉自体が「文字」を意味しますので、正しくはラテン・アルファベット、つまりラテン文字を英語は記述文字として使用していることになりました。

ちなみにラテン文字はローマの文字ということで「ローマ字」(Roman Alphabet)とも呼ばれますが、ローマ字という言い方が、日本では多くの場合文字そのものではなく、ラテン文字を用いた日本語表記法を意味することは周知の通りです。

これは16世紀末に日本にやってきた宣教師が、ラテン語などの表記法を日本語の発音にあてはめて作成した切支丹版^{きしたんぱん}と呼ばれる文献に由来するもので、昭和22年に国語教育のイッカン^{いっかん}として義務教育に導入され、その後必修化されて現在に到っているものです。

(村上寛『ラテン語の世界史』筑摩書房、二〇一五年、による)

注記 原文は横書きであり、引用に当たって数字を漢字表記に改めてはいない。

問一 傍線部1・4の読みを記し、2・3・5・6・7・8を漢字に改めよ。

問二 空白部A・B・C・D・Gに入る適当な語を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 言語学的 イ 対抗的 ウ 慣用的 エ 一般的 オ 宗教的

問三 空白部E・Fに入る語の組み合わせとして適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 子——孫 イ 姪——従姉妹 ウ 従兄弟——甥 エ 叔母——姪

問四 本文の「英語を主要言語とするアングロ・アメリカに対して」以降の部分で中心的に述べられていることは何か。次の中から適当なものを一つ選び、記号をマークせよ。

ア ラテン語文字資料の少なさ

イ ラテン文字の広がり

ウ ラテン語と英語との懸隔

エ 日本語表記法の多様性

二 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

ヨーロッパを旅すると、そこかしこで美しい風景に出合うことができる。

最近ではヨーロッパの鉄道旅を紹介するようなテレビ番組も多いが、車窓に広がる風景の美しさにはため息が出る。

どこまでも美しく広がる牧歌的な田園風景。石造りの町並みは、色彩も統一されている。それが、美観地区や保全地区という特別な場所だけでなく、どこもかしこも、小さな村々にいたるまで、美しく整っているのだ。

こうした美しい風景を見てから日本の風景を見ると、本当にガッカリさせられることが多い。

田園の風景さえゴチャゴチャしていて、田んぼに隣接して住宅地や都市的な施設が立っている。町並みは統一感がなく、猥雑な雰囲気醸し出している。

A 日本は、ヨーロッパが当たり前に残しているような風景を残すことができないのか。 B 日本はダメなの

だ、と思ってしまう。 C 、本当にそうなのだろうか。

D 、この雑多で統一感がない日本の風景の特徴こそ、日本の自然の豊かさや素晴らしさを表しているのである。

ヨーロッパの農村風景を見ると、広々とした畑が広がり、その遠くに村が見える。

しかし考えてみると、歴史的に小さな村の人たちが食べていくために、これだけ広大な農地が必要だったのである。

一方、日本では田畑の面積が小さく、そこら中に集落がある。つまり、少ない農地でたくさんの人たちが食べていくための食糧を得ることが可能であった。だからこそ、昔から人口密度が高かったのである。

ヨーロッパは土地がやせていて、土地の生産力が小さい。

ヨーロッパでは主にコムギやオオムギなどのムギ類が栽培されるが、十五世紀のヨーロッパでは、蒔いた種の量に対して三、五倍程度の収量しか得られなかった。一方、日本ではイネが栽培されるが、同じ十五世紀の室町時代の日本では、イネは蒔いた種子の量に対して二〇、三〇倍もの収量が得られたのである。

もちろん、これは土地の生産力の違いだけでなく、ムギとイネという植物の違いもある。

化学肥料が発達した現在で比較しても、コムギは蒔いた種子の二〇倍前後の収量であるのに対して、イネは一〇〇、一四〇倍もの収量である。イネは生産力がずば抜けて高いのである。

それでは、ヨーロッパでもイネを作ればよいと思うが、イネを作るには大量の水が必要である。雨が多く、水が豊富にある日本だからこそ、イネを作ることができたのである。

それだけではなく、日本でもコムギやオオムギを作った。しかも、日本では稲刈りが終わった後の田んぼにムギの種子を蒔き、一つの田んぼでイネとムギを栽培する二毛作を行ったのである。これに対して、ヨーロッパでは、ムギは毎年は栽培することができず、ムギを刈った後は休閑地として休ませたり、クローバーなどの緑肥作物を栽培したりして、ローテーションを組んだ。日本ではイネとムギの両方を作っていたのに、ヨーロッパでは数年に一度しかムギを作ることができなかったのである。

しかも、ヨーロッパでムギを作ることができたのは恵まれた土地だけである。

寒冷な気候で、やせた土地では、ムギをすることはできず、代わりに牧草を栽培し、家畜を育てたのである。

前章で説明したように、イネ科植物の硬い茎や葉を食料にはできなかった。それらは家畜に食べさせて、肉や乳製品を人間の食料にしたのである。

十八世紀、江戸時代中期の江戸の人口はすでに一〇〇万人を超えていた。これは当時、世界一の人口の大都市であったとされている。大都市であるロンドンやパリよりも人口が多かったのである。

世界一の人口と簡単にいうが、たくさんの人が集まるには、いろいろな条件がいる。

人は誰しも腹が減る。日々、一〇〇万人の腹を満たしていかなければならないのである。これは、日本の食糧生産の豊かさによって可能になったのである。

日本はヨーロッパに比べると、平野が少なく国土が狭い。しかし、江戸時代中期の日本には、すでに約三〇〇万の人口がいた。これは、日本では狭い農地で十分な食糧を得ることができたからである。

生産性の低いヨーロッパの農地で収量を上げようとするれば、農地の面積を広げるしかない。狭い土地で頑張っても収量は増えることなく、それよりも少しでも土地を広げて牛を一头でも多く飼うほうがよい。ヨーロッパでは **E** に土地を広げ大規模にする努力が行われ、粗放的な農業が発達した。(I)

一方、日本では土地の **F** な生産性が高い。手をかければかけるほど、収量は増える。同じ田んぼを工夫すれば、イネとムギの両方を作ることができるし、畑でも手をかければ、さまざまな野菜や作物を作ることができる。

そのため、日本では限られた面積の中で、いかに手をかけて収量を増やすかに努力が払われてきた。もともと、こんなにていねいに手をかけていれば、限られた労力で田畑の面積を増やすことはできない。こうして、日本では **E** に小規模で

G な農業が発展を遂げてきたのである。

¹ 日本は農業生産力の豊かな国である。

しかし、そう言われても首をひねる方も多いだろう。

日本は工業立国であり、農業は脆弱であるというのが、日本の農業に対する一般的なイメージかもしれない。しかし、そんなことはない。現在でも日本の農業生産力は世界の中でも有力なのである。

農業大国というと、アメリカやオーストラリア、フランスなど国土が広く、見渡す限り広大な農地が広がっている国の印象がある。それに比べると日本は国土が狭く、しかも山ばかりで平野が限られている。その限られた平野も、都市的な施設と農地とが、狭い土地を奪い合うようにひしめき合っている。とても農業大国とは程遠いように見える。

農家の経営規模を見ると、日本の農家の平均耕地面積は約三ヘクタール(二〇二〇農業センサス)である。

これに対して、ヨーロッパの農家の平均耕地面積は、フランスとドイツが約六〇ヘクタール、イギリスが約九〇ヘクタールである。アメリカは約一八〇ヘクタール、オーストラリアにいたっては約三〇〇ヘクタールである。これだけ見ると、日本の農家は規模が小さく、国際競争力がないように見える。

ちょっと違ったデータで見てみよう。一アールの面積でどの程度の食料を得ることができるかをカロリーベースで示してみることしよう。(II)

日本では、一アールで約一〇万キロカロリーの農作物を生産できる。一方、アメリカは約二万八〇〇キロカロリーであり、オーストラリアは約一万一〇〇キロカロリーにすぎない。日本の生産力は世界一高いと言える。

アメリカやオーストラリアは広大な面積を誇っているが、主に栽培しているのは、牧草やトウモロコシなどの家畜の餌や、ナタネなどの油の原料である。

日本のように、手間ひまをかけて米や野菜などの食糧を生産しているわけではないのである。

日本の農業はダメだとよく言われる。そんな日本の農業の脆弱性を示す指標としてよく言われるのが「食料自給率」である。日本の食料自給率はカロリーベースで約三八パーセント。つまり、約六二パーセントを海外に依存しているというのである。この数字は、先進国では最低であると言われている。

しかし、日本の主食である米の自給率は約一〇〇パーセント。また、野菜の自給率は約八〇パーセントである。主要な食糧である米と野菜がこれだけ作られていれば、十分な気がする。

それでは、**H** 日本は食料自給率がこんなに低いのかというと、主には家畜の餌となるトウモロコシやダイズなどの自給率が、ごくわずかだからである。

肉の自給率を見ると、牛肉が約三五パーセント、豚肉が約五〇パーセントであり、牛乳・乳製品の自給率は約六〇パーセントである。しかし、肉や牛乳・乳製品を生み出す家畜の餌の自給率は約二五パーセントしかない。そのためカロリーベースの自給率が低くなってしまうのである。

I、日本の食料自給率は一九六〇年代には七〇パーセント以上あったのに対して、それから半世紀の間に四〇パーセント以下にまで低下してしまっている。

J、世界で自給率が高い、低いと大騒ぎしている国など日本以外にない。（Ⅲ）

日本は江戸時代に鎖国を行い、海外との交流を絶った。

しかし、鎖国を行うことができたということは、輸入に頼らなくても **K** できたということである。

実際に、江戸時代の日本は食料のほぼすべてを自給していた。

江戸時代の日本は、すでに人口の密集した国であった。人口の多い国が自国でほぼすべての食料を自給していたというのは、とても珍しい。

それだけではない。日本は衣服も、家の材料も、エネルギーさえ自給していた。

その自給を支えたものが、日本の豊かな植物である。

イネを栽培して得られるものは、米だけではない。イネの茎である藁からは、わらじや草履などの履物や、雨具である蓑や、俵など、ありとあらゆるものが作られた。また、ススキなどの茅は茅葺き屋根の材料となった。

衣類の材料とする繊維を取るためにアオイ科のワタやアサ科のアサを栽培し、クワ科のクワを栽培してカイコを飼育し、絹を生産したのである。さらに衣類の染料としてタデ科のアイやキク科のベニバナなどを栽培した。

紙の材料のために栽培したのはクワ科のコウゾやジンチョウゲ科のミツマタである。（Ⅳ）

イグサからは畳表が作られ、カサスゲという植物は菅笠の材料となった。

また、豊富な植物は家畜の餌となったり、田畑の肥料となったりもした。

エネルギーはどうだろうか。油を取るための植物として、アブラナ科のナタネや、シソ科のエゴマなどを栽培した。そして、ウルシ科のハゼからは蠟を取り、ろうそくを作ったのである。こうして、ありとあらゆる植物を利用していたのである。

現代の私たちは、エネルギーはもちろん、プラスチックや化学繊維など、ありとあらゆるものを石油などの限りある資源から作っている。**L**。

何億年も前の大昔に作られた石油などの化石燃料がなければ何もできないのだ。

一方、江戸時代はほぼすべてを植物から作っているから、資源は枯渇することなく、再生産が可能である。限りある資源を食いつぶしている現代人と比べて、ほぼすべてを植物から作り上げた江戸時代の人たちが **M** とは言えないのである。

（稲垣栄洋『雑草と日本人 植物・農・自然から見た日本文化』草思社、二〇二四年、による）

問一 空白部 A・B・C・D に入る適当な語句を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア だから イ じつは ウ どうして エ しかし

問二 空白部 E・F・G に入る適当な語句の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 集約的 イ 厭世的 ウ 潜在的 エ 伝統的 オ 懐疑的

問三 傍線部 I の内容として適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 日本には山が多く、平野が限られているが、そこでは都市的な施設と農地とがひしめき合いながらも工夫して農業がなされている。

イ 日本の農家の平均耕地面積は、オーストラリアよりおよそ一〇倍の広さがあり、そこでは手間ひまをかけた食料の生産が行われている。

ウ 日本の農家は規模が小さく国際競争力がないように思えるが、経営規模で見るとフランスやドイツよりも平均耕地面積は広く、世界の中でも有力である。

エ 一アールあたりの生産力について、カロリーベースで比べると、日本より平均耕地面積が広いアメリカやオーストラリアよりも高くなっている。

問四 空白部 H・I・J に入る適当な語句を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア しかし イ 確かに ウ どうして

問五 空白部 K に入る適当な語句を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

ア 復活 イ 就活 ウ 自活 エ 死活

問六 空白部Ⅰに入る適当な文を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

- ア しかし、食料を輸出する際には、化石燃料を使用していない
イ それから、食料を輸入する必要があるが、多くの化石燃料を使用している
ウ だが、食料を輸入する必要はないため、化石燃料を使っていない
エ そして、食料を輸入するためにも、多くの化石燃料を使っている

問七 空白部Ⅱに入る適当な語句を次の中から一つ選び、記号をマークせよ。

- ア 最良している イ 驕っている ウ 劣っている エ 騒いでいる

問八 次の文が入る箇所として適当なものを一つ選び、記号をマークせよ。

そもそも日本で自給率が問題になるのは、自給できる力が高かったからである。

- ア I イ II ウ III エ IV

【三】 傍線部1・2・3・4・5にあたる漢字を含むものを下のア～エから一つ選び、記号をマークせよ。

一 ニワ¹で遊ぶ。

- ア タンテイ小説を書く。
イ 三国がテイリツする。
ウ 家のテイキンを守る。
エ テイトクが指揮する。

二 モモ²が句の時期となる。

- ア トウゲン郷の物語を知る。
イ トウケツした路面を歩く。
ウ トウテツした理論をもつ。
エ シントウと仏教を比べる。

三 師匠をシタ³う。

- ア オチボを拾う。
イ ボウソウ半島へ行く。
ウ ボダイを吊う。
エ ボジョウを抱く。

四 種ア⁴かしをする。

- ア 母のミヨウダイとして参加する。
イ キミヨウな現象が観測される。
ウ 宵のミヨウジョウが輝く。
エ ジュミヨウが延びる。

五 天皇のミササギ⁵について調べる。

- ア ドウリョウと仕事の話をする。
イ キュウリョウ地帯が広がる。
ウ センリョウ役者と呼ばれる。
エ 大工のトウリョウに指示を仰ぐ。